

自己評価

本園の教育理念・教育目標

- ・ 幼児期にしかできないさまざまな遊びや活動を通した生活の中で、
社会のルールを学び、思いやる心や豊かな感性、生きる力・学習の根を育む
- ・ 居心地の良い温かな環境の中で、一人ひとりの子どものよいところを認め、伸ばす
- ・ 家庭と幼稚園が手を取り合って、一緒に子どものことを考える
- ・ 全教員が全園児と関る

令和二年 重点的に取り組んだ評価項目ならびに具体的な取り組み状況

今まで経験したことのないコロナ禍での園生活であった。例年とは異なる様々な対応が余儀なくされた中でも、評価の趣旨を理解し、自己点検、自己評価を実施。教師自らが客観的な目で自園の教育を振り返り、主体的に改善に取り組むため課題を明確にするよう努めた。

1. 教育課程、環境の充実<取り組み状況>

- ・ 今年度も、各学年の発達に基づき五領域に沿った教育課程を作成、保育に反映させた。
各学年ごとに定めた教育目標をもとに、月案を作成し発達に応じた保育内容を構築している。
- ・ 保育者は教育的配慮をもって保育活動における物的環境を構成している。人的環境として子どもがすべての活動に主体的に取り組めるよう一人ひとりに応じた援助を行っている。
- ・ 月ごとのカリキュラム作成においても職員間で話し合い、活動におけるねらい、目的を確認し例年にとらわれることなく、コロナ禍での新たな活動も取り入れることができた。
- ・ コロナ禍で子ども達の外出等が規制される中、楽しさを広げるために、卒園、在園の保護者と協力し、園庭に築山を作るなど新たな環境を取り入れた。

2. 教育内容、方法の充実<取り組み状況>

- ・ 政府からの緊急事態宣言発出のため（前年度3月）、4月、5月は休園となった。
休園中はICTについても積極的に取り入れ、ZOOMによる家庭との連携や動画の配信を行い、子どもたちとの関係をつなげていった。また幼稚園生活を意識できるよう家庭でも楽しめる教材を作成し、各家庭に送付した。
- ・ 今年度は分散登園、降園を実施しクラスを少人数に分け、三密を避けながら保育を行った。
少人数制にすることによって子ども一人ひとりの変化を細かにみることができ、遊びの

発展にもつなげられた。

- ・運動会、遠足、音楽会、発表会などの行事も、感染対策に十分な配慮をしながら行った。
 - <運動会> 練習は屋外で行うことを基本とし、熱中症対策もしながら子どもたちにとって無理なく行うように努めた。当日は年長の保護者のみ参観可能とし、主なプログラムについては終了することができた。
他の学年はそれぞれ別日に運動会参観日を設け、学年別に行うことで感染予防にもつながり、また子どもたちにとっても過度な緊張に悩まされることもなく伸び伸びと行事を楽しめたことが今年度の利点となった。
 - <遠足> 子ども同士の距離をとるため貸し切りバスの台数を増やし、また訪問先の施設を貸切ることによってより感染防止に努めながら遂行した。
 - <音楽会、発表会> 例年、保護者は各学年の演目すべてを観覧していたが、今年度は各学年の演目を保護者入れ替え制で行った。舞台上の子どもたちの距離を可能な限り空け、感染状況をみながらの練習となったが子どもたちは十分な満足感をもって挑み、保護者からも賛意を得ることができた。

3. 教師の役割、資質向上 <取り組み状況>

- ・毎日保育後に職員会議を行い、クラスの子どもたちの成長、課題、今後の留意点を報告、相談し今後につなげた。
全職員が全園児への共通理解を深めることによって子どもへの対応に相違がないよう努めることができた。
- ・ZOOMによる研修会にも積極的に参加するなどそれぞれが自己研鑽に努め、その内容については報告しあい教職員間で情報の共有に努めた。
- ・今後の課題として、園内研修をより深め、教職員が持つ保育課題やテーマを明確にし、それぞれが保育の専門性に精通していけるよう取り組んでいきたい。

4. 家庭との連携、子育て支援 <取り組み状況>

- ・コロナ禍により保護者の園内立ち入りは原則控え、保護者会等はオンラインで行った。
- ・降園時に、子どもたちのその日の様子を保護者へ伝えることで家庭との連携を深め信頼関係につなげていった。
- ・日常の保育の様子を保護者へお知らせするため、幼稚園ホームページに在園生のみが見られるブログの更新を随時行い、情報の発信に努めた。
- ・預かり保育においても感染の状況を見極めながら可能な限り行い、支援の必要な家庭に協力する機会を設けた。

5. 安全、衛生、危機管理の充実 <取り組み状況>

- ・全園児に健康カードを配布し、検温、体調の変化などを登園時に確認し、感染防止に努め

た。また保護者が園内に入る際は手指の消毒の協力も仰いだ。

- ・今年度は充実した保育に取り組むとともに、子どもたちへの手洗いの習慣化、昼食時での黙食、パーテーションを活用し感染対策を行いながらの活動、消毒の徹底など職員間で十分に共通意識をもち対策を行ってきた。

各家庭の協力を得ながら、感染を防ぐことができたのは、危機管理の評価に値すると思われる。

- ・地震などの災害への対策として子どもたちと防災訓練を重ね、子どもたちにも防災意識を伝えていった。

例年警察に協力を仰ぎながら行なってきた防犯訓練に対しては、今年度は緊急事態宣言発出となり、警察からの出向がかなわなかった。次年度は、このような環境下でも行えるよう対策をたてる必要がある。

学校関係者評価

1. 自己評価の項目の設定、結果の内容は適切であったか

- ・評価項目の達成状況については、すべての項目において、丁寧に振り返りができていた。
- ・特に、コロナ禍の中、子どもの育ちの保障をいかにしていくか熟慮を重ね取り組んでいる姿が見られた

2. 教育内容、方法について

教育課程、教育目標を掲げ、教育に取り組んでいた。教育活動についてはPDC Aサイクルに基づき継続的に進めている。とりわけ、令和2年度はコロナ禍のため、以下の内容の取り組みが行われた。

緊急事態宣言発出の下、4、5月は休園を余儀なくされたこと、その中で、職員の紹介、歌、ダンスなどの配信、製作キットの配布など教育が滞らないような取り組みが見られた。実施に際し、家庭の状況や職員間での共有など会議を重ね進めていったことは教育内容の保障へと繋ぐものと考えられる。自粛解除後は感染予防への十分な配慮をし、教育理念である「主体的子どもの活動」を重点に教育活動を続けていた。

特に、行事関連では、家庭の意向を反映しつつ、教育の保障も鑑みて実施の可否、実施すべき行事の吟味などを検討した経緯がある。安全面に配慮し、子どもの育ちを第一考え、話し合いを重ねていった結果、保護者から賛同を得、実施へと繋ぐことができた。子どもの経験を大切に思い、様々な工夫を凝らし実現したことが分かる。

3. 家庭との連携

コロナ禍にあったため、例年行っていた保護者アンケートを令和2年度の実施はなかったが、毎日顔を合わせての報告・ホームページ・預かり保育などの実施の対応から家庭との信頼関係は築けていた。コロナが収まった時は、状況を踏まえた園運営を交えたアンケート

等などにより今後の園運営の示唆を得ることができると考える。

まとめ

令和 2 年度は従来スタートではなかったため、子どもの育ちへの影響は少なからずあり、個に応じた援助を行ってきたことは子どもの心の安定や安心に繋ぎ、子どもの主体性を育む教育理念の実践を可能としたこととなった。さらに園バスを採用してない本園の特色がコロナ禍であっても送迎時など保護者との信頼関係を構築しやすい環境の提供となった。自己評価については、今後、数値化する方法もあるので検討を勧めたい。

コロナ禍の中での園運営は様々な課題をもたらしたが、その都度、職員間で熟慮を重ね教育に携わっている姿があった。このことは職員の子どもを思う気持ちと教育に対する熱意の表れであるといえる。今年度の経験を活かし、教育の一層の充実が図られることが今後の課題となろう。

令和 3 年 3 月 貞静学園短期大学教授 齋藤恵子